

坊っちゃん

おやゆず 親譲りの ^{むてっぽう} 無鉄砲で子供の時から ^{そん} 損ばかり
している。

小学校にいる時分学校の二階から飛び降りて一週間ほど ^{こし} 腰を ^ぬ 抜かしたことがある。

なぜそんなむやみをしたと聞く人がある
かもしれぬ。

^{べつだん} 別段 ^{ふか} 深い 理由でもない。

^{しんちく} 新築の二階から ^{くび} 首を出していたら、
^{どうきゅうせい} 同級生の一人が ^{じょうだん} 冗談に、いくら ^い 威張って
も、そこから飛び降りことは出来まい。
^{よわむし} 弱虫 やーい。 ^{はや} と囃したからである。

こづかい お
小使に負ぶさって帰って来た時、おやじ
が大きな眼めをして二階ぐらいから飛び降
りて腰こしを抜ぬかす奴やつがあるかと言ったから、
この次は抜ぬかさずに飛んで見せますと答
えた。

しんるい せいようせい もら
親類の物から西洋製のナイフを貰って
きれい は かず
綺麗な刃はを目に翳かして、友達に見せてい
たら、一人が光ることは光るが切れそう
もないと言った。

切れぬことがあるか、なんでも切って見
せると受け合った。

ゆび ちゅうもん
そんなら君の指を切ってみると注文した
ら、なんだ指ぐらいこの通りだと右の手
のおやゆび こう
の親指の甲こうをはすに切り込んだ。

さいわ 幸いナイフが小さいのと、親指^{ほね}の骨^{かた}が堅
 かったので、^{いま}今だに親指は手に付いてい
 る。

しかし創痕^{きずあと}は死ぬまで消えぬ。

庭を東へ二十歩^ほに行き^つ尽くすと、南上^あが
 りにいささかばかりの^{さいえん}菜園があつて、
^{まんなか}真中に^{くり}栗の木が一本立っている。

これは命^{いのち}より大事^{だいじ}な栗^{くり}だ。

実^みの熟^{じゆく}する時分は起き^お抜け^ぬに背戸^{せど}を出て
 落ちた奴^{やつ}を拾^{ひろ}ってきて、学校で食う。

^{さいえん}菜園の^{にしがわ}西側が^{やましろや}山城屋という^{しちや}質屋の^{ていつづ}庭続き
 で、この質屋に^{かんたろう}勘太郎という十三四のセ
 ガレがいた。

かんたろう よわむし
勘太郎は無論弱虫である。

めがき
弱虫のくせに四つ目垣を乗りこえて、栗
ぬす
を盗みにくる。

おりど かげ かく
ある日の夕方折戸の陰に隠れて、とうと
つか
う勘太郎を捕まえてやった。

に みち
その時勘太郎は逃げ路を失って、一生懸命
に飛びかかって来た。

としうえ
向うは二つばかり年上である。

弱虫だが力は強い。

はち ひら あたま むね
鉢の開いた頭を、こっちの胸へあててぐ
お ひょうし
いぐい押した拍子に、勘太郎の頭がすべ
あわせ そで
って、おれの袷の袖の中にはいった。

邪魔^{じゃま}になって手が使えぬから、むやみに
手を振ったら、袖^{そで}の中にある勘太郎の頭
が、右左^{みぎひだり}へぐらぐら 靡^{なび}いた。

しまいに苦し^{くる}がって袖^{そで}の中から、おれの
二の腕^{うで}へ食いついた。

痛^{いた}かったから勘太郎を垣根^{かきね}へ押し付^おけて
おいて、足ガラをかけて向う^{たお}へ倒してや
った。

山城屋^{やましるや}の地面は菜園より六尺^{ろくしゃく} がた 低^{ひく}い。

勘太郎は四つ目垣^{めがき}を半分崩^{くず}して、自分の
領分^{りょうぶん}へ真^まっ逆^{さかさま}様に落ちて、ぐうと言った。

勘太郎が落ちるときに、おれの袷^{あわせ}の片袖^{かたそで}
がもげて、急に手が自由になった。

その晩母が山城やに詫^わびに行ったついで
に裕^{あわせ}の片袖^{かたそで}も取り返して来た。

このほかいたずらは大分^{だいぶん}やった。

大工^{だいく}の兼公^{かねこう}と肴屋^{さかなや}の角^{かく}をつれて、茂作^{もさく}の
人參^{にんじん}畠^{ばたけ}をあらしたことがある。

人參^{にんじん}の芽^めが出揃^{でそろ}わぬところへ藁^{わら}が一面^{いちめん}に
敷^しいてあったから、この上で三人が半日
相業^{ともう}をとりつづけに取ったら、人參^{にんじん}がみ
んな踏^ふみつぶされてしまった。

古川^{ふるがわ}の持っている田圃^{たんぼ}の井戸^{いど}を埋^{うず}めて尻^{しり}
を持ち込まれたこともある。

太^{ふと}い孟宗^{もうそう}の節^{ふし}を抜^ぬいて、深^{ふか}く埋^{うず}めた中か
ら水^{みづ}が湧^わき出て、そこいらの稲^{いね}に水^{みづ}がか
かる仕掛^{しか}けであった。

その時分はどんな仕掛けか知らぬから、
石や棒^{ぼう}ちぎれをぎゅうぎゅう井戸^{いど}の中へ
挿^さし込んで、水が出なくなったのを見届^{みとど}
けて、うちへ帰って飯を食
っていたら、古川が真^まっ赤^かになって怒鳴^{どな}
り込んで来た。

たしか罰金^{ばっきん}を出して済^すんだようである。